

## 伝統芸能と子ども (第1報)

— 新野の雪祭りの記録 —

松崎行代

The Traditional Art of Public Entertainment and Children (Part 1)

— Report of “Yuki-Matsuri” in Niino-Village —

Yukiyo MATSUZAKI

**要旨:** 長野県下伊那郡阿南町新野に室町時代より伝わる雪祭りは、国の重要無形文化財に選定され、民俗学的にも高い研究価値を認められている。長い歴史の中でムラの人々の生活に根付き伝承されてきたこの祭りは、ムラビトの心の拠り所と言える。

本稿では、雪祭りに参加する子どもたちの現状を平成15・16年の2年間にわたる調査から報告するとともに、その中に見られる子どもたちの育ちについて考察した。

子どもたちは祭りの仕事・役割を通して自己の存在を確立させ、ムラに対する愛着感を一層深め、また自然(神)に対する畏敬の念を知った。

伝統芸能などの地域文化は多様で縦走的であり、そこに潜む教育力は大変大きい。本稿を礎に、伝統芸能と子どもについて児童文化的見解を深めていきたい。

**Key words:** 伝統芸能 (the traditional art of public entertainment), 仕事 (work), 地域教育 (region education), 雪祭り (Yuki-matsuri), 子ども (children)

### はじめに

長野県の最南端、下伊那郡阿南町新野に伝わる新野の雪祭りは、昭和52(1977)年、国の重要無形文化財に指定され、民俗学研究者には多くの示唆を与える神事芸能として有名である。雪祭りのクライマックスは、1月14日深夜から15日の朝にかけて、伊豆神社の境内で繰り広げられる庭能である。大松明の灯りの下、庁屋(本殿向かって左の支度部屋)から出て本殿に歩み寄る面形をつけた舞手に、観衆は「寒い、眠い、煙い」のを忘れ見入る。素朴な面形の数々、夜の神社に響く笛や太鼓の楽の音、一緒に踊り出したり囃し立てたりしながら観衆までもが神と一体となって楽し

む祭りの雰囲気は、そこに集まった人々をすっかり魅了する。

そんな中、筆者の目をひときわ惹いたのは、祭りに参加する子どもたちの姿であった。小さな松明を手に舞手の歩み進む場を確保する袴をはいた少年、白い装束をつけ胸の前に太鼓を構えて舞う幼い男児、祭りの進行を見守るように遠巻きに舞を見る赤い袴の女兒など、夜を徹した厳冬の戸外の祭りにもかかわらず、少しの甘えも感じさせない真剣な子どもたちの姿に、気持の良い厳しさを感じた。

三隅治雄は、ムラに息づくその土地の産土神を中心としての祭りには、信仰面ばかりでないムラにとって重要な機能が託されていたとして、次の6つの機能を挙げている<sup>1)</sup>。

- ①信仰的機能：祭りの集団行動を通して、ムラと人の生命長久、生産増強、災厄鎮送を祈り、明日の生活に希望を持つ。
- ②教育的機能：祭りに披露する芸能の教習を通して大人になるための鍛錬を積む。また先輩からふるさと文化の歴史を学ぶ。
- ③社交的機能：ものづくり、歌舞修練を通じてムラビト相互の交流を果たし、連帯意識を強化する。
- ④娯楽的機能：祭りを公に許された休日として、飲む、食べる、遊ぶ、見るなどして、大いに享樂し、日頃の鬱屈を晴らす。
- ⑤芸能的機能：ものづくり、歌舞づくりに工夫を凝らし、技の洗練に心を入れて、日頃、内に蓄えた美への情熱の具象化を果たす。
- ⑥生産的機能：祭りに結集するムラビトの生命の昂揚によって、明日からの生産の意欲を強める。

これは、児童文化研究の立場から子どもの発達と文化の観点で小林剛が言う、「地域の文化力(教育力を含む)」に相通じると考えられる<sup>2)</sup>。

小林が「地域の文化力」に着目したのは、古田足日の提唱した「子どもの文化」が引き金になっている。つまり、狭義の主に児童文化財や子どもの文化活動におさまることなく、子どもの人間形成にかかわるより広く、深く、多様な縦走的な文化の全領域から子どもの発達について考える必要があるという問題提起である。

小林は、「子どもの発達は、日常の生活習慣や労働、自然や社会環境、さらには大人のなにげない言動や価値観、生き方などによって形成される場合がはるかに多い、すなわち人は文化という土壌の中に生まれながら、『文化(文化的自然)』を耕し、同時に自らの中に『人(人間的な自然)』を創り出す存在である。その意味で、人が文化を創るだけでなく、文化も人を創る。」<sup>3)</sup>と述べている。

現在、多くの日本各地の祭りは、古来から

の形をどう次代に引き継ぐかに多くの課題をかかえている。しかし、祭りの芸能を傳承するということは、その形を留めること以上に、そこで生きる人たちにとって生きていくことそのものに通じる重大な価値があると言えるのではないか。

三隅の挙げた6つの祭りの機能の中で、子ども自らが直接体験し学ぶものとして②教育的機能、③社交的機能などが真っ先に挙げられる。しかし、そのほかの4つの機能についても自らの体験を通さずとも大人の姿を目の当たりにし間接的な体験を通して多くのことを学んでいるに違いない。

新野の子どもたちは、雪祭りを通してどんな体験をし、そこからどんな学びをしているのか。まずは雪祭りと子どものかかわりの現状把握を行い、考察していきたいと考えた。

本稿においては、平成15・16年の2年間にわたる祭りの記録を主な研究資料としている。そのため、地元小中学校における地域の伝統行事・芸能を教材として取り入れた授業、および学校行事、クラブ等での取り上げ方、また、過去長いムラの歴史のなかでの子どもたちの祭りへの参加の様子等についての詳しい調査は現在継続中であり、本稿では取り上げていない。

## 1. 雪祭りと新野の人々

### 1) 雪祭りの概要

新野の雪祭りが行われる伊豆神社は、鎌倉時代の初めの頃、伊豆国伊豆権現の神人伊東氏が村を開発し、伊豆山権現を招来したのが起りと伝えられている。そして、この祭りは、伊東氏が奈良の春日大社のお祭りを持ってきたという説、伊勢の田の神祭りを持ってきたという説などが折り重なっており、その解釈については先学諸氏によって研究が重ねられている<sup>4)</sup>。

この祭りを「雪祭り」と呼ぶようになったのは、大正15(1926)年折口信夫がこの地を

訪れた際、地元の篤学者仲藤増蔵氏に、この祭りにまつわる雪の習俗と祭りの一名に「雪祭り」があることを聞き、それを世間に広く紹介したのがきっかけとなった。古くは、田楽祭りとか二善寺のお祭り、正月神事、御神事などと呼ばれ、「雪祭り」の名称は地元ではほとんど使用されていなかったようである。しかし、新しい年の始まりに神の来訪を仰いで、雪を稲穂の花に見立て当年の成り物の吉兆をあらかじめ誇示して豊作を予祝する、いわゆる豊年予祝の祭りとしてのこの祭りの意図とこの名が附合したことから、抵抗なく受け入れられ今日広く浸透している<sup>5)</sup>。

雪祭りは、1月14日から15日朝にかけて、夜通し伊豆神社で繰り上げられる。その祭事は大きく2つに分けられる。すなわち、神楽殿の儀・本殿の儀といわれる「舞」と、庭の儀といわれる本殿の前の庭で行われる面形を着けた踊りに近い舞や狂言があった「庭能」である。そして、この庭能に登場する面形の数々が雪祭りの御神体である。伊豆神社の祭礼に先立つお上りの行列で渡御する神輿の中に数々の面形が納められ、その周りを人々が固めて長い行列となりお社に道中する。これらの面形を着けた者はその場において神となって人々の前に出現し、いろいろなことをやって予祝を請い、やがて帰っていくのである。

三隅は、「雪まつりの中に、神を生きものとして扱い、生きるものとして崇め、生き物として振舞う、そういう形と心が、現在なお生き残っている。だから私たちが雪まつりを眺めていると、『日本の祭りは、こういうものだったんだなあ。いつも神様は架空の存在でなくて、生きた存在として現われ、人々に祝福を与え唱え言を言う、あるいはいろいろな呪術をする。そうしたことが日本の本来の祭りの元の姿だったんだろう』ということを実感する<sup>6)</sup>と述べている。そして、人間が神の資格を持って登場し、それを村人が真実の神として受け止める。この神と人との交わ

りという行為そのものが祭りの本質であり、それが展開して祭りが芸能になっていく。そういう経過を一晚の祭りの中で見せてくれるのが新野の雪祭りだ<sup>7)</sup>と、この祭りの特徴とその芸能史上の意義を語っている。

## 2) ムラビトのかかわり方

新野の人々は、まさに三隅が述べたように、生きた存在として神を感じ神とともに過ごす祭りの時を毎年楽しみにしている。15日午前2時を回った頃、大松明の灯りの下に次々と人が集まる。ムラビトはただの見物人ではなく、舞手の踊りを批評したり、一緒になって踊ったり、ほめたり、まさに舞手とともに庭能を盛り上げ楽しむ。見ることも、大松明を作るために各家の門松を神社に持って行くことも、行列が通る際家族そろって玄関先に出て神輿に手を合わせて祈り送ることも、行列の行く手を塩水で清めることも、そんな少しいことであっても、何らかの形で新野の人々は雪祭りにかかわっている。雪祭りは自分のムラのお祭り、自分の生活にかかわる神様のお祭りなのだという意識を誰もが持っている。新野の人々にとって雪祭りはどういうものか尋ねたところ、「雪祭りのない一年は考えられない。心の拠り所」と何人もの人が答えた。農事が一区切りし、新たな年を迎え、神とムラビトが一体となって行われる祭りに、みなそれぞれの形で奉仕し、祭りを執り行っているのである。

しかしながら、祭りに参加する人の減少がここ何十年も問題になっていることも事実である。神事の執行に直接当たるのは神社の神職と内輪(うちわ)衆・上手(わで)衆といわれる氏子であるが、伊豆神社はムラの総鎮守であるので、氏子であるムラビトは希望すれば誰でも参加できる。しかし、特に昭和40年代以降ここ何十年かにわたり、祭りへの参加者の減少が問題となっている。地域の人口の減少、高齢化ということもあるが、サラリーマン世帯が増え祭りにかかわる時間が確保し

にくい、また、青年層の消極的な姿勢などがその原因として挙げられる。

## 2. 伝承への取り組み

—家庭・保存会・学校と子ども—

### 1) 雪祭りへの子どもの参加

雪祭りは小正月の伝統行事であるが、長野県内の小正月の行事、三九郎(どんど焼き)のような子ども主体の祭りではない。そのため、子供組のようなある年齢に達したことで半強制的に所属し祭りに参加する組織は以前から無く、子どもたちはあくまでも個人の意思でそれぞれの希望した年に雪祭りへの参加を決める。

昭和20年代後半から30年代前半にかけて、大人も子どもも祭りへの参加人数は多く大層にぎやかだったそうである。また、昭和28(1953)年には岩波で映画化され、それまでの民俗学研究者ばかりでなく幅広い人々の関心も集めた。この頃は戦後の混乱も終息し次第に経済が安定し、祭りは村の娯楽としてみなが楽しみにしていた。しかし、その後の高度経済成長に伴う人口の都市部への流出、生活形態の変化などの影響を受け、新野においても次第に祭りに参加する人が減少していった。

大人の祭り参加者の減少の中、伝統芸能の伝承を念頭に置き子どもへの期待はますます大きくなっている。最近ではさまざまな取り組みにより、お下り・お上りの行列の笛に参加する子どもを40人以上はほぼ毎年維持するようになった。また、舞などの神事に直接関わる役に参加する子どもも20人程度を安定して見込めるようになってきている。しかし、大人の参加者が約35人でこれ以上の増加の可能性が低い中、もう10人程の子どもの参加が期待されている。

### 2) 子どもの祭り参加に影響を与える環境

このような現況において伝承問題は大きな課題であるが、現在子どもたちの雪祭り参加

に影響を与えているものを考え、次の3つを挙げた。①それぞれの家庭、②保存会の活動、③学校である。

#### ① 家庭の影響

祭りに小さなときから参加する子どもたちを見ると、その家族が祭りにどのように参加してきているかというそれぞれの家庭環境に大きな影響を受けていることが窺える。祭りは伊豆神社の神職を中心に氏子が行う。新野地区の全戸は基本的に伊豆神社の氏子であるが、雪祭りの神事の責任を負う人たちが、本座・下条地区の東から約50軒、新座・関地区の西から約50軒がそれぞれ上手組という組織を作っている。これらの約100軒すべてが毎回祭りに参加しているわけではないようであるが、上手組に属している家の中でも祖父、父と代々積極的に祭りに参加している家の子どもたちは、自然な流れの中で、小学校低学年、早い子どもでは3歳で、後立(ごだつ：初めて祭りに参加する男児)になることが多いようである。祭りのすばらしさを知っているからこそ、息子や孫にもぜひそれがわかるムラビトになってほしい、その想いが父親や祖父たちにはあって子どもに祭りへの参加を促す。一方子どもは、小さな頃から父親や祖父の姿を見たり話を聞いているので、祭りに対する関心も大きく、迷うことなく早い時期に前向きに祭りに参加するのだろう。

親の手を離れての夜を徹しての祭りの参加に対し親の不安は大きい。祖父や父が参加していることで安心する母親もいるのではない。このような点も、祖父や父が参加している家庭の子どもの方が祭りに参加しやすい要因になっていると思われる。

#### ② 保存会の影響

保存会は昭和27(1952)年、文部省が雪祭りを「無形民俗文化財」に選定したのを機に設立された。その会則には、第4条1 雪祭りの笛、太鼓、舞、詞章、行事を正しく伝承する。

第5条 右の事項を達成するために次の部会を置き各部ごとに指導、育成、研究等の事業計画を立てこれを遂行する。

1 舞指導部会 楽指導部会<sup>8)</sup>とある。

楽指導部は、およそ20年前から新野地区の阿南町立新野小学校および阿南町立第二中学校へ出向き、笛の指導を行ってきた。小学校では原則として5・6年生を対象に各学年12月中に2回、中学校では全学年まとめて12月中に1回。そして、1月に入り、地域内の農村文化伝承センターに有志が集まり、お下り・お上りの行列の隊を組んで笛を吹く練習を1回行う。

この活動の開始に当っては、まず小中学校に各30本ずつの笛を寄贈し、各自が1本ずつ笛を持って練習できるようにした。ここ5、6年は、指導者の1人が笛の製作も手がけるようになり、毎年数本ずつその数を増やしている。子どもたちは12月の練習開始から祭りの終了まで、各自笛を持ち帰り練習を重ねることができるのである。

15年ほど前は、なぜこのようなことをするのかといった消極的な子どもの様子も見られたが、特にここ数年は小学校の総合的な学習において地域の伝統行事を学んでいることが影響し、以前より積極的に取り組む姿が増えたそうである。また、5年生になると笛をやるということが、子どもたちの間に定着してきているようである。

祭りの参加に対してその成果は徐々に現れ、平成10年頃より、お下り・お上りの行列に笛で参加する子どもたちが増えていった。それ以前は20人程であったが、ここ数年は40人を越える参加を維持している。平成15年のお下りの笛の参加は46人、平成16年は44人であった。該当学年の児童生徒数約80人、そのうち受験生である中学3年生の不参加を考慮すると約7割の参加と考えられる。

以前は祭りに参加できる女性は巫女の役で

ある市子のみ、しかも一生に1度のことであった。現在も女性が舞役になることは出来ないが、行列で笛を吹き楽として参加できるようになったことは発展的な変化として捉えてよいだろう。保存会では今後の伝承を見据えたとき、舞は男性だけに限定せざるを得なくても、近い将来は女性の楽を育て、行列の笛ばかりでなく舞の楽として笛を奏でることができるようになっていきたいという考えも持っているようである。

祭りに欠かせない笛や太鼓の楽は、舞以上に何十年にもわたる長い修練が必要である。そのため、祭りの伝承・保存を考えたときに子どもたちに笛の技術をどう伝えていくかは大きな課題であった。現在、保存会の続けてきた地道な活動により着実にその成果が現れてきたといえる。

### ③ 学校の影響

新野の雪祭りは、1月14日から15日にかけて伊豆神社で行われる庭能が際立って採りあげられるが、祭り一連の次第は、昭和39(1964)年に日程が短縮された現行の祭り次第でも、13日のお下りから16日の座敷払いまでと4日間にわたる。そして、この間は直接祭りに参加する者は大人から子どもまでその一連の行いに参加するのが原則である。

この期間、学校はいわゆる雪祭り休みと称する休みが計画される。年末年始休業は一旦7日頃終わるが、13日から16日にかけてあらためて休みとなり、子どもを含めムラビトミなが祭りを祝うことになるのである。

直接祭りに参加するしないの違いはあるものの、学校の協力を得て、ムラビトがこぞって祭りを楽しむ姿勢がムラに溢れていると考えられる。つまり、民俗学がいう祭りの意義、この日ばかりは労働から離れハレの日として神と戯れ楽しむ、豊年を祈る、そんな日としてこの祭りを代々大切に守ってきたこのムラの人々の思いがそこにあるのである。

60代後半の男性が子どもの頃つまり昭和10

年代頃にも新野ではこの雪祭り休みがあったというのであるから、近年になって伝承のためとか子どもの参加を確保するために学校に頼み込んでこのようになったのではないところに、新野にとってのこの祭りの存在の大きさを感ずる。

これに反して国は、小正月の祝日であった1月15日の成人の日を平成12(2000)年より1月の第1月曜日とした。これは、15日を小正月とし年取りの行事を行う日本の文化を蔑ろにするものではないか、15日が平日になることにより祭りへの参加が困難になる人が増えたことは、伝統芸能の伝承を困難にする大きな問題でもあるし、それ以上に自国の文化を守っていく上でも考え直したい問題である。

また、新野小学校では昭和53・54年にへきち教育研究の一環で「ふるさと学習」に取り組み、ふるさと新野地域に根ざした教材とかかわるなかでふるさと意識やゆたかな心とたくましい実行力を育てる教育に取り組んだ<sup>9)</sup>。もちろん、雪祭りもその重要な教材として採りあげられ、「雪祭りカルタ」が生まれ、それを使って遊び、雪祭り集会を全校挙げて楽しむなどの活動が展開され、子どもたちは民俗芸能文化財としての雪祭りの理解を深めた。

当時5年生で9歳から祭りに参加している30代後半の男性は、このふるさと学習に全校あげて取り組んだことを印象深く憶えていた。この学校での取り組みの影響か、この時期多くの子どもの祭りへの参加があり、参加した子どもの中には舞の役がつかない者が多かったということである。その4歳年上の男性の記憶では、クラスで3・4人しか参加していなかったということであるので、やはり、学校での取り組みによって子どもたちの雪祭りへの関心の向け方、伝統芸能に価値を認める姿勢が育てられたと考えられる。

また平成14(2002)年からは総合学習が始まり、その中でこの雪祭りも教材となった。子どもたちは、祭りのいわれや歴史などを幅

広く学ぶ中で、祭りについての見聞を広げるとともに、祭りを通して自分の生まれ育った新野という地域について見直す機会になった。

この時期も、再び子どもたちの祭りへの参加が増加したということであり、学校での取り組みが子どもたちの雪祭り参加に与える影響力の大きさがわかる。

### 3. 雪祭りに参加する子どもたち

#### 1) 雪祭りの諸役と子ども

雪祭りは神職を中心に氏子が奉仕して執り行われ、以下のような諸役がある。

**内輪衆(うちわしゅう)**：祭りの幹部。現在では神官・宮司の神職と氏子総代が行う。

**上手衆(わでしゅう)**：雪祭りの神事の責任を負う。新野地区を東西2組に分け、各組50人程がいる。毎年そのなかから持ち回りで東西各2人が上手の頭人となりみなを統括する。

**平(ひら)**：内輪衆・上手衆以外の祭りに奉仕する一般の氏子。

子どもたちはこの平に入る。

**市子(いちこ)**：市子は祭りの巫女の役割を担う。以前は3・5・7・9・11歳の数え年奇数の歳に市子になるのが決まりであったが、現在では特に年齢にこだわらない。巫女という神の使いをする市子になれるのは一生に1度に限られている。

市子は、お滝入りの行列、お上りの行列、御参宮や代参りにおいても常に集団の先頭に立ち神と人々をつなぐ役割を担っている。

**後立(ごだつ)**：後立は男子で初めて祭りに参加する者のことである。かつては市子同様、奇数年の男児がほとんどであったが、平成15年には小学2年生8歳の男児と40代の男性、翌16年には児童の後立はなく2人の成人男子が後立であった。市子は幼い女兒に限るが、後立は年齢に関係なく祭りに初めて参加する男子であることがわかった。いくつかの書籍においては男児のみと受け取れる説明が多いが、現在ではさまざまな理由により成人になっ

て祭りに参加するようになった場合も出てきている。上手の頭人が順番で廻ってきて参加せざるをえなくなり後立となった人が多い。この年代の人たちが小学生であった昭和30年代から40年代は高度経済成長の時期で、一概には言えないが、経済発展の影で日本の伝統文化は消滅の途に動き出した時と言われている。社会そして学校の中でも地域文化の重要性が省みられなかったことが多少なりとも影響していたと考えられる。

後立になると、田楽を舞うビンザサラ 8人のうちの4人のシツトリという太鼓と小鼓の役を受け持つ。(このシツトリの名も書籍ではシツデと記されているが今回の調査では新野の人々はシツトリと言っていた。)太鼓や小鼓をひもで体に付け両手に撥を持つが、4人のササラの後について動くのみで、音を立て演奏することはない。

以前は後立も多く、シツトリになるのもクジ引きで決めることもあったそうであるが、現在は後立でない男児なども担当し行うことで補っている。

楽：笛や太鼓を演奏する者のことである。

長い修練による演奏技術の構築が求められる笛や太鼓の奏者である楽は、昔は祭りにおいて別格の扱いを受けていたそうであり、状況が変わった現在も、諸役において楽は舞とは別立てで考えられている。楽として一人前になるには長い修練が必要で、平成15・16年の2年間の調査においては、中学生の1人が舞の楽の一部に加わっていた程度で、子どもたちの楽はもっぱらお下り・お上りの参加に留まっている。

12月中の学校での練習、1月の農村文化伝承センターでの練習を経て子どもたちは行列に参加する。学校での笛の練習は授業内に行い全員が体験するが、祭り本番に笛の参加をするか否かは各自の意思による。しかしこの2年間の様子では、前述したように約7～8割がたの参加がみられた。

13日の諏訪神社での神事の際には、中学生の男子1人も大人に混ざり太鼓にあわせ笛を奏でていた。全部で10曲余りあるという曲をすべて習得するにはかなりの練習が必要なようで、楽譜がない上に、曲想の似たものが多いくつもあり、ある程度の経験を持つ人でもつい間違えそうになることもあると聞いた。14日の伊豆神社の舞の際には太鼓部屋(本殿向かって左側の楽の場)に入って笛を奏でる子どもは見かけなかったが、数年後には舞においても楽を行う若者が徐々に増えることが期待できる。

## 2) 舞役と子ども

神職・禰宜が受け持つことが決まっている舞役以外は、希望を申し出て御神籤によって選ばれば平の者も舞役をやることできる。舞役には次のようなものがある。およその登場順にそってあげる。

①論舞：東西のササラ16人、その内シツトリ 8人 ②万歳楽 ③順(ずん)の舞 ④さいほう(幸法) ⑤もどき ⑥競馬(きょうまん)：一の馬、二の馬 ⑦牛 ⑧翁 ⑨松影 ⑩しょうじきり(正直切) ⑪海道下り：禰宜である父、息子 ⑫神婆(かんば)：婆、爺、娘 ⑬天狗(てんごう)：太郎、次郎、三郎 ⑭八幡：八幡、駒 ⑮しずめ(鎮)：しずめ様、獅子2人 ⑯鍛冶：親鍛冶、番子、鍛冶の娘 ⑰田遊び

かつて大勢の大人の参加者があり、子どもに任せられる舞役は少なかった。大正時代から昭和10年頃には大人の参加者だけで60人から70人を数え、舞に参加できるような子どもはほとんどいなかったということである。

これらの舞役のうち、⑦牛は宮司がやることになっている大切な役。また、⑧翁、⑨松影、⑩しょうじきりは、それぞれ面のいわれやその役のいわれ、富貴繁栄をことほいで各地の宝物を数えたり、神名を唱えたりする詞章をとなえる。このようなこともあり何十年の経験を持ち祭りに精通した老人が行うこ



とが多い。⑫海道下りは、禰宜の親子が都からはるばる街道を下ってきて当社を祝う内容を、一種の狂言仕立てにしたもの。また鍛冶も鍛冶屋の親方と弟子の茶番狂言で大筋は決まっているものの即興的に演じられる。このような舞役の特徴を押さえ、経験の浅い者や年端のいかない子どもには、語ることによる演技がほとんどない舞役が任せられるようである。

1年に1度のことではあるが、毎年見続けている舞役の動きはいつの間にか覚えているため、前日の何度かの指導により、どうかかその舞の動きをこなせるようになる。しかし、詞章や演技となると長い参加経験が必要であろう。

平成15・16年の雪祭りにおいて、子どもが行った舞役は、シットリ、万歳楽、競馬二の馬、神婆(婆、爺、娘)、八幡の駒、しずめの獅子であった。

日本の祭りにおける伝統芸能では、老婆の役を子どもがやるのが多くみられ、そこには老人と子どもの関係から子孫繁栄の願いが込められていることがあるが<sup>10)</sup>、雪祭りの場合、以前は青年やそれ以上の年齢の高い人もやっていた、最近になって中学生以下の子どもたちがやるようになったことを聞くと、そこまでの民俗学的ないわれは込められていない。以前から、新野の雪祭りでは、市子以外、子どもがやる役という限定されたものはなかった。ここ数年、成人の参加者の減少により以前は大人が行っていた役を子どもが補わざるを得なくなり、いくつかの舞役は子どもが行うことが慣例化されるようになった。

舞役は希望により御神籤をした上で、神様の許しを得た者が行うことを許される。希望を出す際にも、何年間平での参加があるのかという実績が考慮される。最近では、まずはシットリ、次にしずめ様と共に出てくる獅子でこれは頭と脚の方と2人で行う。その次に神婆の婆と爺と娘、その次に天狗という順で

経験に合わせて希望を出すことが暗黙の基準になっている。平成15年には、小学生であっても数年3歳から祭りに参加し既に経験が10年以上の小学5年生が、舞役の花形のひとつと言える競馬の二の馬を見事やり遂げ注目された。

### 3) 祭り次第と子ども

祭りは、前行事として、伊豆神社における1月1日の門開きから始まる。

ここでは平成15・16年の記録より、祭り次第にそって子どもたちの参加の様子を中心に報告する。

#### <行列の笛の練習>(1月1週目日曜日)

12月中の学校での笛の練習をうけ、祭りのお下り・お上りの行列の笛に参加しようとする有志の児童生徒が集合し、最後の稽古を受ける。行列には小学5・6年生と中学1・2・3年生が、毎年40人以上参加するようになった。12月の練習では音の出し方、曲の練習を行い、子どもたちは1人1本ずつ渡された笛を持ち帰り各自練習を重ねてきていた。

この日は行列になって歩きながら吹く練習を中心に行った(図1)。



図1 行列の笛の練習

#### <お下り>: 1月13日

早朝6時、笛を持った子どもたちが次々に伊豆神社に集まる。集まった子どもたちは楽の指導者の指示を受け、全員本殿前に並び拝礼をし、消防団や氏子らとともに行列を作る。

6時半、面形を収めた神輿を中心にした行





図2 お下り

列が伊豆神社の参道を下り(図2)、新野の繁華街を進む。気温は低く、どの子どもの笛を持つ手も真っ赤にかじかんでいる。

千石平と呼ばれる村の中央部は一段と標高が高い吹きさらしの平地で、休憩のない行列では一番苦しいところである。横殴りの雪交じりの強風を受けながらも笛の音は途切れることなく演奏され続ける。

カイロで手を温めたりしばらくポケットに手を入れながら、約1時間かけて3キロ程離れた諏訪神社まで行列は進む。

到着後、参加した子どもたちには、一人ひとりのし袋に収められたお年玉が渡される。笛のみの参加の子どもたちはここで解散となる。

#### 〈市子・後立の受け付け〉

お下りの行列が諏訪神社に到着後まもなく、市子と後立の受付が始まる。市子、後立は自分の名前を名乗り、米1升と薦1枚(なければ金1,000円)を神官に奉納して受付が終了



図3 市子の受付

する(図3)。

市子は赤い袴を借り身に着ける。平成15年は3人、翌16年は6人の市子の参加があった。友達が出ると一緒に出ようかということで1人決まると数名の市子が申し出るようである。唯一祭りに参加できる女性である市子は巫女であるので、市子がいないと祭りが執り行えないことになる。以前は、事前にやってくれる女兒を探すことに苦労したこともあったようである。

#### 〈面開き〉

神職らが神輿から面形を取り出し、面棚に並べる。

#### 〈お年取り〉

この日からの食事は、子どもたちも大人も祭りの主たる神事に参加する者は全員神社でそろって食事をとることになる。以前は祭りの数日前から氏子の家を数名ずつでまわくりや入りを行っていたが、昭和40年に入り廃止された。

祭りに参加する人は精進をしなくてはならないため、食事は四つ脚の動物の肉は食べない。飯、味噌汁、いわし、漬物、煮物、豆腐などが主な献立の内容であった。食事時間も祭りの進行によって普段とは随分ずれた時間帯になることも多かったが、これらに対し内心はどうであれ不満を口にする子どもはいなかった。

諏訪神社でのこの日の朝食をお年取りと言う(図4)。



図4 お年取り



### <ビンザサラの舞>

東・西の順でビンザサラの舞が舞われる。ササラ4人、シットリ4人が向かい合ったり円を描きながら舞う。子どもたちは太鼓や小鼓を持つシットリになる(図5)。経験の浅い小さな子どもには大人がついて動き方を教える。子どもも他の人の動きを見ながら必死で自分なりに考えて動きについていこうとする。正確さよりも、こういう過程を経て次第にムラの祭りを支える者になっていく場と捉えている寛容さがある。



図5 ビンザサラの舞：シットリの子ども

### <論舞>

東西の上手が2人で向かい合ってビンザサラと扇を交互に持ち替えて舞う。

### <宣命(神おろし)>

禰宜、上手らが太鼓を打ち、宣命歌を唱える。

### <順の舞>

神職から舞の上手な順に舞を奉納する。

### <御神籤>

面棚の部屋に全員が集まり、舞役を決めるクジ引きをする(図6)。

子どもたちも、論舞や順の舞が行われている最中、自分のやりたい役を申し出ると、担当の老人が、希望と山かさ(平の経験年数)を考慮したうえでクジ引きの準備を行う。ある程度経験を積んでくると舞役に積極的に名乗り出るようになり、見映えする役には人気が集まるようである。

子どもたちには神婆が人気で、3・4人の



図6 御神籤

子どもが希望し、自分が当たるようにと自分で作ったお守りを御神籤の最中握り締めている姿もあった。

希望者の名前を書いて折りたたんだ小さな紙の上を、神職が御幣を揺らして動かすと、神様の許しを得た者の名前を書いた紙が御幣に1つだけついてくることで役が決まる。とうとう希望がかなって神婆に選ばれた男児は喜びに涙を流すほどだった。

個人的な思いや逆に単なる客観的な参加年数などの判断材料ではなく、最終的には神様のお告げによってやらせてもらう、ここにもムラビトの神に対する敬虔な姿勢が見られる。

### <昼田楽(試楽)>

舞役が決まると、しょうじっきり、海道下り、神婆、天狗、八幡、しずめ、田遊びの順で舞が舞われる。このうち、神婆、爺、娘、八幡の駒、しずめの獅子は子どもがやることとなった。

この昼田楽は、明日の伊豆神社の境内の庭で行われる夜田楽の舞の試舞でもあるが、本来は諏訪神社の例祭である。

[神婆]:面を着ける緊張感。経験者の大学生が一つひとつの動作についてアドバイスする(図7)。

この役には腰抱きという後ろで腰を支え持つ介添え役がつく。それをしながら舞について教えている。役になった子どもたちは、希望した役になれた喜びと、責任を感じながら短時間の限られた練習に必死に臨む。





図7 小学生の神婆役に指導する大学生

神婆と爺の最後の抱擁は男女の交わりを表すが、その所作に子孫繁栄や作物の無事な生長と実を結ぶ収穫への願いが込められていることを子どもたちも理解している。現在のゆがめられた性の扱いではない大らかな性の扱いとそこに込められた思いが、このような場できちんと伝えられていくことの良さを感じる。

<お滝入り>

昼食を済ませると、祭りに加わる者のみそぎとして全員近くの滝へ行き滝の水で身を清める。頭人を先頭に市子が続き、「お滝よー」の声をあげながら滝へ向かう。

子どもたちは裸にはならず、木の葉で滝の水を頭に軽くつけてもらう。(図8)大きな役のついた大人はふんどし姿になり、滝の水を背中に受ける。三々九度で左右に3回ずつまわして滝の水を受けると、身を切るような水の冷たさでみるみる背中が真っ赤になる。

<御立式>

諏訪神社に戻ると、御立式が行われる。ま



図8 お滝入り



図9 御立式(御盃)

ず総会として今年の祭りの諸注意などが伝えられる。

引き続き、御盃(後立式)となり、市子と後立一人ひとりに甘酒、餅、お年玉が与えられる(図9)。

引き続き、本殿で諏訪神社の例祭が行われる。

<諏訪神社の例祭>

[ビンザサラの舞]: 先程のビンザサラの舞は本役ではなかったが、ここからは今年の祭りのササラ舞の役に選ばれた者がそれぞれビンザサラ、シットリ(太鼓、小鼓)として舞う。

[舞役の論舞](図10)

[御祭典式]: 本殿を開扉し例祭を執り行う。

御祭典式の際、市子は神職の脇に控え一番前の中央に座す。神殿の扉が開き、神職が供え物を運び込み神事が行われる。



図10 諏訪神社例祭の論舞



### <御参宮>

市子、後立以外の者が本殿外の庭に出て、一同そろって「万歳楽、万歳楽、御万歳楽」と言って廻る。

### <万歳楽>

この時、本殿内では内輪の論舞に続き、市子・後立による万歳楽が行われる。1人ずつ神殿に向かって「万歳楽、万歳楽、御万歳楽」と唱え3回拝む。全く初めてのため、宮司が背中について一人ひとりに指導してくれる(図11)。



図11 諏訪神社 万歳楽

### <代参り>

祭りに参加できない人の代わりにその人の干支を唱えながら「〇〇の歳の代参り」と唱えて鳥居と神殿を3回行き来して拝む。

### <面化粧>

19の舞形の面の化粧直しをする。その歳の吉の方向を向いて机を配し、黒・白・朱の彩色を施し、紐の調子を確かめたり、和紙のひげなどを張り重ねたりする。雪祭りの神は、



図12 面化粧

舞に用いるビンザサラや面形に宿る。つまり、それらが御神体であるので、扱いは全員含み紙をしてあたる。棚からの取り出しと納めは神職が行い、氏子たちが1つつ面形を手にし彩色に廻るが、それらの受け渡しの際は一回一回拝礼し敬虔な雰囲気の中かで執り行われる。

3色の彩色を担当する者、紐の具合を見る者の4人は舞い役によって決まっている。平成15年に競馬の二の馬になった小学5年の男児は紐の調子をみていた(図12)。

### <競馬乗り合わせ>

競馬になった2人が、馬を着けずに弓矢を持って舞を舞う(図13)。動きについて記されたものはないので、経験者からその場で直接細かな指導を受ける。クジで役が決まり翌日には本番が迫った中での指導は、教える側も習う側も真剣である。

ここで13日の一連の行事は終わり、遅い夕食をとって、全員帰宅する。



図13 競馬乗り合せ

### <松明こしらえ>

14日朝8時、伊豆神社に集合。大人も子どももまず本殿に一礼し、社務所に入ってお茶を飲み、本日の打合せをする。

午前中に伊豆神社の例祭の準備を行う。この際、舞役ごとと請け負う仕事が決まっているものがある。例えばさいほうともどきは、境内すべての注連縄の張替え、競馬は松明作りのときに松を押し込むように上に載って指揮をとる、階段の提灯を取り付ける。天狗3人



は御殿の注連縄編みなど。

子どもたちも、大人に指示されながら言いつけられた仕事をこなす。松明をこしらえるため村中から集められて山となった門松を松明の木の枠の上に運ぶ(図14)。一晩中燃やし続ける薪を庁屋の壁際に運ぶ。庭や階段の掃除、雪掃き。注連縄を編む際の藁の整え(図15)など。

大人ともども子どもも、それぞれにできるところにかかわり手伝うことで雪祭りの仕事を少しずつ覚えていく。一回一回参加を重ねるなかで、毎回任せられる事が増え新しいことをやらせてもらうようになる。それまでは大人がやる様子を憧れを持って見ていた仕事を自分が任されたうれしさや、昔の生活のなかに根付いていた古人の知恵を知る発見の喜びなどを子どもたちは感じている。既に雪祭りに20年以上参加している30代後半の男性は、「20年以上参加していても毎回毎回覚えることばかりで常に新鮮な気持ちで祭りに臨める」



図14 大松明作り



図15 注連縄作り

と語った。

すべての作業が終了し、遅い朝食を10時過ぎにとって一旦帰宅。2時に諏訪神社に集合する。

### <鹿島立ち>

小正月の年取りのご馳走の食事である鹿島立ちをいただき、いよいよお上りの準備が整う。

### <お上り>

午後4時の出発にあわせ、笛の子どもたちが諏訪神社に集まってくる。昨日のお下り同様、5年生から順に白衣を着る。全員そろっての拝礼の後、鳥居を先頭に列が組まれる。

お下りでは参加する子どもたち全員が楽の笛だったが、お上りでは平の子どもたちはそれぞれの役を持っているので、笛の人数はその分少なくなっている。

午後4時、お上りが出発する(図16)。遠くからでもよく目立つ華やかな赤いはかまの市子、白い衣裳を着てササラや太鼓・小鼓を持ったピンザサラやシトリ、黒い衣裳に烏帽子を被り弓を携えた競馬など、衣裳を着けての行列はお下りとは違った華やかさがある。

「そーれ」という掛け声に合わせて、太鼓と子どもたちの奏でる笛の音に沿って行列が進行していく。通りの家々は玄関先に家族総出で立ち、行列を見送る。塩水で行列の通道を清め、面の収まっている神輿に向かい手を合わせる。また、競馬に弓で頭をなでてもらい厄払いをしている人もいる。



図16 お上り



1時間20分後、行列は伊豆神社に到着。笛の子どもたちは、お下り同様に真っ赤な手をさせ、時折カイロや手袋で指を温めながら笛を奏で続けた。

#### ＜神迎え＞

東のビンザサラ8人と天狗3人は近道を通り伊豆神社に先行する。神楽殿でビンザサラを行っているところに天狗の灯す灯りに導かれて行列が境内に到着する。

#### ＜神楽殿の舞＞

本殿向かって右にある神楽殿は地上約2メートル以上の高さがある。東西のビンザサラ計16人。このうち、太鼓と小鼓のシットリ計8人は子ども。

[ビンザサラの舞]：東に次いで西が行う(図17)。

[論舞]：舞役の論舞、内輪衆の論舞が2人ずつ交替で、彩り物を順に取り替えて新薦の上で対峙して踊る。

[万歳楽]：市子、後立が順々に出て、両手に扇子を持ち「万歳楽、万歳楽、御万歳楽」と唱える。

[神下ろし]：新薦の上に大太鼓を据え、禰宜がそれを打ちながら宣命の上の句を唱え周りの内輪衆、上手衆が下の句を唱和する。

[順の舞]：1人ずつ順に出て舞う。右手に鈴、左手に扇を持って舞う。

吹きさらしの神楽殿において3時間近くかけて神楽殿の儀は進行される。舞役および楽はずっとここで過ごす。



図17 伊豆神社神楽殿ビンザサラの舞い

#### ＜松明立て＞

午後8時頃、消防団により高さ約5メートルの大松明がを立てられる。簡単には立たない大松明を、見物人そして市子たちなど参加者も、掛け声を掛けながら見守る。

＜伽藍様のお祭り＞：上手、もどき、ササラ、笛が本殿裏の伽藍様に詣でる。供物をささげもどきが御祓いをし、舞を舞う。

この楽の音を聞いて眼下の本殿では本殿の義がはじまる。関係者は全員本殿に集まり座している。

#### ＜本殿の儀＞

[万歳楽]

[御参宮・代参り](図18)



図18 伊豆神社 代参り

[神おろし(宣命)]

[中啓の舞]：舞人が1人ずつ出て両手に中啓を1本ずつ持って舞う。奉仕者のうち希望者が奇数人になるように何人かで舞う。

[順の舞]

#### ＜広場の神事＞

[乱声(らんじょう)]：消防団が庁屋の壁を薪でたたき、神々が早く出てくるのを催促する。この時庁屋の中では神職とさいほうが御神火を持って庁屋に入り、面開きが行われる。

[大松明点火]：神職により大松明に点火。宝船を使って点火される。

[庭開き]：松明に点火する直前に東のササラ8人が松明の周りを廻る。そして点火と同時に西のササラが笛を振り回して松明の付近で周り、東と西のササラが一緒になって「らん



図19 庭 開 き

じょー、らんじょー」といいながら9回廻る(図19)。

### <庭 能>

大松明の灯りの下、庭能が始まり、15日の朝9時過ぎまで延々と神の舞が続く。

[さいほう]: 一番最初に出てくる優しい面形の神様。右手に松の枝、左手にひし形のうちわを持って、庁屋から9回庭を行ったりきたりする。7回目に東のササラ4人を連れて出てくる。東のビンザサラは松明が灯るとそれまで着けていた花笠を焼いてしまうので、ここでは烏帽子をつけている。9回目にはシットリも加えビンササラ8人を連れてくる。ビンザサラが舞っている間に、さいほうは松明の火あおり、餅あぶり、冠ほめ、刀ほめ、また、男根様の木の棒を女性につけて廻り妊娠、安産のまじないをする。さいほうが戻った頃、ビンザサラの舞は終わりに近付き、ササラ・シットリの舞い手は「大雪でございます」と連呼する。

[もどき]: さいほうとほとんど同じだが、舞の動きはすべて逆になる。7回目に西のビンザサラ8人を連れて出てきて終わる。この時面を着けた笛吹き、太鼓も出てくるが、もどきとうまく調子が合わず、もどきが笛を取り上げたり太鼓を蹴ったりする。この太鼓は音は出さず、太鼓の横にいただけ。子どもがやっていた。

シットリの子どもたちは、以上で舞の出番が無事終了する。衣裳を脱いで、少し緊張が

解けた面持ちで、この後は引き続きの舞を見る。

[競馬]: 面は着けず立ち烏帽子を被り、馬の作り物を肩から掛けて登場する。見物人の人ごみの中に入ると、まるで馬に乗っているように見える。一の馬、二の馬それぞれ天狗役の舞手がかざす的めがけて矢をいる。これは年頭に当たって悪霊退散の呪方法をして豊年を占うといわれている。そのため、この競馬の役は見ごたえがするばかりでなく、参加者にとってはとてもやりがいのある大きな舞役であるようだ。平成15年に山かさ10年の小学5年生がやったが、中学生以下の子どもがこの大役をやることは今までにはなかったようである(図20)。



図20 競 馬

[お牛]

[翁]

[松影]

[しょうじきり]

[夜流れ餅]: 夜流れ餅が神社に届けられ、祭りに参加している者に1つずつ配られる。何も味付けしていない小豆をつけたおはぎ様の餅は子どもたちはおいしくないと言っていた。これは縁起物として家に持ち帰り家族と共に食べることが多い。

[海道下り]

[神婆]: 婆、爺、娘とも子どもがやるのが最近では多い。

婆は赤い着物に赤い手ぬぐいを頭に巻き、ひじを曲げた両手を左右に激しく振り、軽い





図21 神 婆



図22 神婆の爺

足取りで庁屋から登場する。動きが激しいためか、婆には腰抱きがつく(図21)。本殿前まで進む途中、3回ほど薦がひかれ、婆はそこで腰を下ろす。後ろで腰を支えていた者が、扇子で婆の着物の裾を仰ぎ、少々卑猥な所作をする。本殿までの行き来を3度繰り返すと、庁屋の前に這うように出てじっとしていた爺(図22)が、急に駆け出して婆の元へ駆け寄り2人は抱擁する。

そこへ庁屋から娘が飛び出し、2人の周りを駆け回りながら庁屋に引き返す。この時、「伊勢国渡合郡禰宜の娘、神婆舞ったり、神婆舞ったり」と言う。

これは男女の感染所作を表した一見下品にも見える舞であるが、子どもたちは照れることもなく一生懸命舞う。その様子は真剣そのものだ。動きの激しい婆、じっとしながらも

その出て行くタイミングをじっと待つ爺と娘。

性に対する昔の人の大らかさを感じるとともに、子どもたちはそこに込められた稲作に結びつけた豊年祈念の意味を理解している。祭りの意味の理解に通じている。

[天狗]：太郎，次郎，三郎の3匹の真っ赤な鬼の登場。この時間になるとすっかり境内も明るくなる。見物人も少なくなっているが、子どもたちを含めた参加者は庭で祭りの進行を見守っている。

舞手が出てきて本殿に進む道を確保する松明を持つ少年は、一晩中最後まで自分の仕事に真摯に取り組んでいる(図23)。

[八幡]：駒は子どもがやる(図24)。

[鎮め]：獅子は2人がかりで子どもがやる(図25)。

八幡も鎮めも神で、駒や獅子は悪霊である。本殿前まで進むと、薦の上に駒や獅子はひれ伏す。そこに八幡、鎮めがそれぞれ跨って鎮める。腰をかがめての駒と獅子の舞は大変な



図23 一晩中松明を手に舞を見守る



図24 八幡の駒





図25 鎮めの獅子

ようであるが、時折もっと腰をおろせという注意を受けて姿勢を保ち直しながら舞っている。後で聞いたところ、駒をやった男児は寒さや眠さは気にならないが、駒をやったときの正座が苦しかったと言っていた。

[鍛冶]

#### <田遊び>

大松明の燃え残りの横に太鼓を置き、五穀、米、餅、稲束を乗せて、三宜を置いて、神職、内輪、上手らが田遊びの歌を唱える。

松明も焼け崩れ、これで祭りの一切が終了する。子どもたちもそれぞれ帰路につく。

#### <座敷払い>：1月16日

翌16日、諏訪神社、伊豆神社の片付けを行い、その後、祭りに参加した者全員で祝いの宴を行う。これでこの年の祭りのすべてが終了する。

## 4. 祭りを通しての学び

### 1) 仕事・役割を通しての学び

高度経済成長の進行によって、家庭構造の変化も余儀なくされ、家事労働の質も大きく変化した。そして1960年代以降、家事労働や生産労働の担い手として子どもの参加を必要とする状況や意識が極端に減少していった。

この状況に、小林剛は「子どもにとって『働くこと』は、『遊ぶこと』『学ぶこと』と同様子どもの成長発達を支える土壌としての豊かな活動の場である」と、現代の子どもの生活に不足している労働の意味の大きさについて

調査をまとめている<sup>11)</sup>。

では、この雪祭りは子どもにとってどういう場であるか。それは、まさに神への奉仕の場・労働(仕事・役割)の場であると言える。氏子として祭りに参加する者の行為のすべては神様に対する奉仕なのである。

「はじめに」であげた祭りに参加する子どもの姿には、ひとつの仕事・役割を任されたことに取り組むひたむきな一所懸命さが溢れていた。

それは神の存在や、祭りに真剣に取り組む大人たちの姿がまわりにあったからこそと思うが、そういった中で仕事・役割を通し自分の存在価値をきちんと感じられることが、彼らの自信となり、さらなる前向きさ、そして祭りに従事することへの喜びと満足感を生み出しているのである。

おそらく日常生活において、主体的に家の手伝いをしている子どもは少ないと思われるが、14日午前中に行われる伊豆神社の大松明立てなどの準備においては、大人の指示でさっと動き、松運び、まき運び、境内や石階段の掃除、注連縄を作るために藁を整えることなど、休む暇なく2時間あまりの作業に積極的に取り組む姿があった。

外部の者が雪祭りとして捉えているのは面形をつけた舞役が登場するクライマックスの部分であろうが、それ以前の準備の段階も含め祭りであること、そして、そのような目立たない部分も含めた祭り全体にかかわることのできる喜びを子どもたちは十分知っている。

そのなかで子どもたちは、学校教育における体系的に教授される教科に沿った知識や技術ではなく、祭りを通し、この土地に伝わる生活の知恵や共同体で生きていく人間関係、社会性なども身に着けていく。これは直接的な仕事・役割を通しての学びだからこそ可能になっているものであり、この点はさらに後述する。ここではまず子どもたちが仕事・労働に携わることの最も大きな価値として、そ

こに自分の存在が自分自身で感じられ、やりがいと自信を持てることだという点を強調しておきたい。

## 2) ムラに対する愛着

新野の子どもたちは、高校を卒業すると多くはこの地を離れる者が多い。しかし、この祭りには県外の大学から帰省し参加するという青年や、1時間ほど離れた場所に住んでいるが祭りには必ず戻ってくるという青年などもいる。20代30代の参加者が少ないことが嘆かれているが、現代の社会構造からすると、このような何日にもわたる祭りに参加するにはいくつもの困難があることも事実である。

しかし、このムラで生まれ育った者にとって、たとえこの祭りに参加できないとしても、雪祭りがあるということの意味はとても大きいようだ。自己形成にも影響し、成長した後も心の拠り所となっていると答えるムラビトが多い。

ある青年は、「2歳のころから父、祖父と毎年一緒に参加しており、雪祭りのない一年は考えられない。雪祭りは今の自分を形成する上で欠くことのできないものです」と述べている。また、ムラを離れている青年は、「村外に住んでみて、1月14日には帰りたいな、見に行きたいなと思う。雪祭りは新野の人々の心をつなげているんじゃないかな」と、離れてこそわかるふるさとの意味と価値、その核に雪祭りがあることを実感している。

ふるさととは何か。さまざまな考え方や捉え方があるが、生まれ育った土地という地理的な観点はそのごく一部でしかない。人や風景やそこでの生きた思い出の数々が総合され、そして先の青年の言葉のように、自分をつくってくれたもののある場所なのではないかと言える。

新野には雪祭りがあることで、強いムラビト同士のつながりが生じ、ムラを離れているにかかわらず、ムラにおける自分の居場所を感じられるのではないか。

つまり新野のムラの人々にふるさと新野に対するアイデンティティーを生み出しているのは雪祭りなのである。この強いふるさと新野へのアイデンティティーを持っていることは、現代のような変動の大きい社会で生きていく者にとって、何らかの、しかし大きな力になっていることは間違いない。

## 3) 共同体の中で感じる一体感

13日から16日まで、祭りの一連の次第に参加する氏子の大人そして子どもたちは、その4日間、雪祭りの奉仕者として共に神の前で生活をともにする集団となる。食事を共にし、一つひとつの神事を決められた次第に沿って執り行う。

ここでは血のつながりでなく、氏子としての関係によるタテとヨコの幅広い人間関係のなかに身を置くことになる。

現代社会においては、地域社会のつながりが希薄化され、都市部では隣近所の住民が挨拶も交わさずに、個々の家庭が孤立して社会生活を営んでいるという現状も各方面で報告されている。

確かに経済構造が変わり、山間部の新野地区においても、以前のような農業中心の生活からは大きな変容を見せている。昔の農業中心の生活においては、村人全員がお互いに助け合い力を寄せて暮らしていくことが必要だったが、現在では地域間のつながりをそれほど必要としない人々も増えている。

しかし、現在多発する子どもを取り巻く事件などを考えるに、地域全体で子ども見守り育てることがもっと考えられるべきではないか。

祭りが終わり、ある青年が、「小さい頃から祭りに参加してみて、大人も子どももひとつになって祭りをすることはすばらしいことだと思う」と言った。これは、多くの大人のなかでさまざまな教えを受けながら、ムラの人たちと一緒にあって祭りをつくり上げる本当の喜びを知る者の言葉だと感じた。

家族ではない者の集団だからこそその甘えのきかない厳しさや、しかも伝統を教授する責任のなかでの厳しさはあるものの、すべての子どもの名前と顔を把握し、1年ごとの成長を毎年きちんと見つけている大人たちのあたたかさは、子どもにとってとてもうれしいものであることは間違いない。

そのような人間関係のなかで雪祭りに臨み、無事祭りが終了したときの喜びをともに感じあうことは、さらにその人間関係を強いものにしていく。

雪祭りがあることで新野の地域に暮らす人々が心をつなぎ合わせているのを感じる。

#### 4) 伝承を核とした異年齢の者との幅広いかわり

雪祭りには3歳くらいの子どものから70代の老人まで幅広い年齢層の参加者がある。子どもたちを見ても、保育園児、小学生、中学生と10歳ほどの年齢の違いがある。

そのなかで子どもたちは、自分より幼い者への心配りや指導を自然に行うようになり、また、指導を受ける年長者への尊敬の念を抱く。

神社の社務所の中に用意された子どもたちの部屋では、食後や特に仕事のないときなど、子どもたちが集まりトランプなどのゲームに興じていることもあった。遊びを取りまとめたり、また遠慮してコタツに入らない子を心配したりなど、何年か雪祭りへの参加経験を重ねた年長の子どものほかの子どもたちへの配慮をごく自然なかたちで行っている。

また、3歳から参加していたという大学生は、自分がかつて舞った神婆の舞を今年の舞役に率先して指導を施していた。手や足の動かし方、歩み出る道筋、薦に腰を下ろした時の演技など、要所を押さえた的確な教え方をしていた。

新野では、子どもたちを含め地域住民の日常のかかわりは積極的に行われているほうだと思うが、子どもたちの日常の遊びの場面で

の異年齢のかかわりと、祭りにおける異年齢あるいは同年齢の子どもの間のかかわりは少々異なるものがあるように考える。それは、やはり祭りの伝承の重みがそれぞれの参加者の気持の中にあり、そこから生じる厳しさではないか。

この点は、大人と子どもの関係の中にも見ることができる。子どもたちは、家族である父や祖父であろうとも、この場においては祭りの先輩であり、指導を受けるときは親子の関係から一線を画しているような雰囲気を感じる。指導の最中は、「はい」「ありがとうごさいました」という言葉が子どもたちから聞かれる。指導する大人も室町時代から延々と続く祭りを伝承していく責任を背負い、子どももそれを引き継いでいく責任を感じているのではないか。

中学1年生の男児が、祭りに参加する大人の人たちをカッコいいと感じるといっていたが、日常生活の中で大人が働く姿を間近に見ることの少なくなった子どもたちにとって、この祭りの場は、大人の働く姿を子どもが見ることのできる場にもなっている。

子どもたちはここで、大人の姿をあらためて見つめる機会を得て、大人になることを考え、働くということ、ムラのなかで生きていくことなど考えることができる。

#### 5) 自然や神への畏敬の念

かつてこのような芸能を伴う祭りが盛んだった頃の生活は、農業中心であった。当然、自然の力の大きさを人々は感じ、自然に逆らって生活したり農業を行えないことは言うに及ばないことであった。人々は日ごろから神の存在を信じ、神への信仰心を持って生活を送っていたわけである。

農業にもっとも影響を与える天候は今でも人間の手ではどうにもならないことではあるが、昔の人々は神の存在を信じ、天候の安定を神に祈ることを心の拠り所にしたのである。

経済成長があり、農業中心の生活とは大き

な変化を見せた現代の生活において、日常生活から神の存在や信仰心が薄れてしまっているのは仕方ないことのようにも思われる。

しかし、この伝統芸能の祭りを伝承させていく際には、神の存在や信仰の部分が多岐の人の生活と切り離されて、芸能だけが飛び出して注目されることは避けたい。

ササラや面形を神として慎重に尊厳の気持を持って扱う大人の様子、御神籤での神の声を聴くような緊張感、こと細かく昔から伝わる通りに伝承するよう祭り次第を行う様子から、子どもたちは祭りの中のひとつひとつに込められる意味を知り、神の存在についても感じていく。

朝神社に来るとまず本殿に拝礼する子どもたちの姿に、新野には神が存在し、祭りに参加する子どもたちが神とかかわりを持って生活している姿を垣間見た思いがした。

保存会の方々も、舞のいわれや、舞の動き一つひとつに込められている意味を伝えることで、子どもたちがさらに祭りに興味を持って祭りにかかわり、後世に伝承していくことに積極的になってくれることを願っている。

「上手下手でなく、農の心を大切にしながら、地味な心の中から光るものを感じることが大切」と、子どもへの願いを語ってくれた老人の言葉が印象的である。

## おわりに

児童文化の領域から子どもと伝統芸能について今後研究を進める第一歩として、平成15・16年の新野の雪祭りを調査し記録をまとめることから取り掛かった。

雪祭りは民俗学的にみて日本の祭りの最も古い形を残すものであり、また、遠州街道にそって奥三河に通じる花祭り等との関係性などから多くの研究者の注目を集め、大変貴重な祭りともみなされている。しかし、その伝承においては、今後大きな課題をかかえている。

祭りで行われる芸能は、そのときだけのショーではない。それは何百年にもわたるその土地の歴史やそこで培われた生活・文化を内包したものである。社会の変化によって人々の生活も変化するのは当然のことであり、文化は伝承の過程で常に人々によって新たにつくられていくともいえる。しかし、その長い歴史の礎や人々の想いを無視した安易な変容を遂げることがあるとしたらそれはなんとしても避けなければならないことだと考える。雪祭りに参加する子どもたちの姿を2年間追うなかで、単なる見物人として雪祭りを訪れていたときには見えなかった、祭り・伝統芸能の伝承の深遠な意義が見えてきた気がする。そしてここ新野の生活者・ムラビトである子どもたちは、雪祭りのあるこの新野の風土の中で育まれていることを感じた。まさに人と文化によって育てられている。

現代の社会で見捨てられがちな生活観にこそ、子ども時代に体験すべき事柄がたくさん含まれているように思う。仕事・役割の喜びと労働仕事・役割を通しての学び、地域の人々とのかかわりの中でともに生活していくこと、ふるさとへのアイデンティティーの確立など。これらは、現在学校教育において言われる「生きる力」にも通じるのではないか。

雪祭りがあることで新野の人々は心豊かにこの土地での生活を営んできた。社会の変化は否めないが、その土地の核となる文化財があることはそこで暮らす住民にとって、そこで育っていく子どもたちにとってとても意味のあることである。

今後、さらに子どもたちにとって雪祭りがどのようなものであり、子どもの育ちにこれらの伝統芸能がどんな価値を持つのか、客観的な考察ができるよう、学校・家庭の実情の調査等も含め研究を進めて行きたい。

新野では、平成16年6月より財団法人伝統文化活性化国民協会の事業として行われる「伝統文化子ども教室」を開催する運びとなっ

た。この活動を通してさらに年間を通して子どもたちに新野の伝統芸能を伝えていくことが積極的に行われることが期待される。

## 謝 辞

本研究に当たり、ご教示また資料の提供、調査のご協力をいただきました、雪祭り保存会の林重明会長はじめ会員の皆様、および関係各位の皆様に、深くお礼申し上げます。

## 註

- 1) 三隅治雄：芸能の谷<伊那谷>第4巻山国の文化再興，新葉社，長野，1986，pp.140-144.
- 2) 小林剛：子どもの発達と文化ーよみがえれ遊びと生活ー，椋の木社，東京，1985，pp.IV-V.
- 3) 同上，pp.4-5.
- 4) 中村浩，三隅治雄：雪祭り，東京，1969，pp.2-29.
- 5) 同上，pp.48-50.
- 6) 三隅治雄：芸能の谷<伊那谷>第1巻日本芸能誌のルーツ，新葉社，長野，1986，pp.29-30.
- 7) 同上，p38.
- 8) 新野雪祭り保存会会則より
- 9) 長野県下伊那郡阿南町立新野小学校：昭和53・54年度文部省へき地教育研究 ふるさと学習研究紀要，新野小学校，長野，1979，
- 10) 宮田登：老人と子どもの民俗学，白水社，東京，1996，
- 11) 前掲，子どもの発達と文化ーよみがえれ遊びと文化ー，pp.272-294.

## 図

図1～図25は筆者撮影。